

研修報告

二十八年度日帰り研修

直川の石塔群と正定寺への旅

吉田 勝重

(会員 佐伯市女島)

二十八年度第二回日帰り研修は、九月十七日に実施された。八時いつものように城山下の駐車場集まりバスにて直川に向かった。参加者は二十名。

今回の研修地は、直川地区にある石塔文化財（神内笠地藏・正明寺跡層塔・宝篋印塔・経王塔）と新しく作成された正定寺の襖絵である。

一、はじめに

この直川地区赤木は、明治十年二月には勃発した西南戦争最後の激戦地である。特に標高五四〇メートルの陸地峠からちの戦いはその最大のものであった。政府軍と西郷軍がこの峠を巡って五月上旬から七月中旬まで

の二ヶ月間争い、特に六月下旬の戦いは熾烈を極めたという。西郷軍は下直見・上直見・赤木地区を前線とし、一時は赤木、仁田原に官軍が取り残される事もあったという。



陸地峠の碑と西南の役戦場跡

県境の尾根伝いには今なお当時の台場跡が残る。

私たちはそういう歴史を持つ直川地区の石塔群を視察した。

二、神内釈迦堂石幢（六地藏と笠地藏・重制石幢）

神内釈迦堂石幢は六地藏と笠地藏の二つである。

左側の六地藏は県指定有形文化財である。溶結凝灰岩で造られており、室町後期の天文十八年（一五四九）の造立と伝えられている。



高さは二、二メートル。積み重ね式の基礎の納穴に塔身上部が安定して建てられている。塔身は四角で笠も四角である。中台龕部の各面に浮彫で八体の佛が彫られている。特殊な形式のものである。塔身前面に、

「謹奉造立六地藏一基 盛嶽右京助貞則 為右現世

安穩 後世善処也 其時天文十八年己酉九月十二日

施主敬白」とある。この地方に住む盛嶽右京助が現世の無事平穩と来世の善所（極樂往生・天界・人間界）を願って建てた物である。

右の笠地藏は大正元年の大洪水により流失し、現在のものは発掘した物であるという。完全に残されていれば六地藏同様県指定文化財になると考えられるが現在は旧直川村指定有形文化財となっている。塔身は丸みのある六角で、長さが六〇センチメートルである。総高地上二、八メートルぐらいの物と推定される。中台は複辨蓮龕部には六面に各一体ずつの佛が浅彫りで刻まれている。現在の高さは一、五二メートルで全面に「伊左衛門母 施主当村」の名がある。村の人々が伊左衛門の母の菩提を祀ったものである事がわかる。これと同じ物が延岡の北側にもあるという。

三、栗林正明寺跡層塔（赤木字栗林）

この層塔は正明寺の層塔と呼ばれ旧直川村文化財の一つである。伝承によれば正明寺は大友宗麟キリシタン信奉により焼き払われたと伝えられている。



層塔の銘記により、室町前期の応永十一年（一四一
一）には建立されていたと考えられる。現在の層塔は
復元したもので原形は五層、高さ三、六メートルと推
定される。塔身は四面に月輪を陽刻し、金剛界四仏の
阿闍如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来の種

子を葉研彫（やげんぼり）にしている。この種子というのは密教で
仏・菩薩を標示する梵字（ぼんじ）（サンスクリット語）の事であ
る。

昭和四十七年四月復元の際、当時の舍利壺（しやりつぼ）が無傷の
状態で出土した。即ち、当時の仏舍利供養塔である。
塔身には「蜜劫聖即信願主各信力弥堅善根增長二世願望
一切衆成三界六凡全登彼岸是応永十八年辛卯三月十
五日時結衆ホ大工玄宗 敬白」と書かれている。

四、転輪院浄光寺跡の宝塔と宝篋印塔（赤木字寺畑）

次の訪問地は堂師（どうし）にある浄光寺跡の宝塔と宝篋印
塔である。この一帯は寺畑と言われ、中世の頃は佐伯
四国八十八ヶ所五十三番札所の転輪院（てんりんいん）浄光寺があっ
たところで、赤木七ヶ寺の僧堂であったという。

僧堂とは禅宗の座禅修行の本寺のことで、多くの僧
が参集していたと思われる。敷地内の古塔は復元され
た三十余基と残存の相輪、笠、宝珠などが点在してい
る。

宝篋印塔二基には墨書（ぼくしょ）の銘記が見られる。その一つ
に「応永二十八年（一四二二）二月彼岸中」の文字が

見られる。



転輪院浄光寺跡の宝塔と宝篋印塔群

宝塔は高さ一、八二メートルで塔身四方に金剛界四仏の種子が描かれている。これが浅く薬研彫りで描かれている。浄光寺の古塔は、庵主酒井閑道僧師により発掘され、地区民の協力で復元された。



五、観音寺の宝篋印塔ほうきょういんとう（赤木字中ツル）

次に私たちは海潮山観音寺の宝篋印塔を見学した。この宝篋印塔は仁田原にある宝林山正定寺の前身である正定寺跡にあったもので、天正七年己卯十月五日

の銘が刻まれている。のち一時正定禪寺の方に移されていたが観音庵が出来た時、元の位置に戻されたとい
う。

この塔は多数の古塔の中でも勝れたものである。



塔の高さは一、七メートルあり塔身上部に納経穴がある。塔の四面には種子が彫られている。また、この近くにある小型の宝篋印塔には造立年次の銘がある。

預修全得功德主管宣明安信女（永正九年壬申八月）
預修全得功德主苔巖光薰居士（永正九年壬申如意）



海潮山観音寺跡の二基の宝篋印塔

六、吹原石幢（笠地蔵）と五輪塔（赤木字ヒケリ）

この塔、昔榎と檜の古木の中にあつたが、県道拡張の際現在の地に移転した。塔は凝灰岩で造られた高さ一、八メートルのもので塔身正面に「願主玄碩上座白」、右側面に「明応五季甲戌二月彼岸中」との名が銘記されている。明応五年は一四九六年で佐伯氏九代佐伯惟世の時代である。幢身上段六面に六地藏が刻まれ、その上に大きな笠を戴き宝珠は火焰で見事な幢である。

伝説では、耳の病氣にご利益があり、その昔近郷近在の老若男女が香華を供えたという。銘文より「高僧玄碩跪いて尊び崇め奉り御地藏様にお願ひ申し上げます。衆生が諸々の病氣、わけて耳病にご利益をお授け下さるよう」と建立したものであろう。

隣の五輪塔には塔身前面に墨書が残されている。

応永四年（二三九七）の年号と花押と思われる痕が見られる。応永四年は室町前期足利義持の時代である。

この頃は、豊後の大友氏と山口の大内氏、福岡の少弐氏が博多の貿易権益を巡って対立していた時代である。



吹原の笠地蔵（吹原石幢）と五輪塔

七、青柳の経王塔



この経王塔は、法華経大般若経のような最も有り難いお経を一石一字に書き留めて収められた塔で、地区の人々に「笑い地藏」と呼ばれ親しまれている。

この経王塔は高さが一七四センチメートルあり、右側面に願主当邑 今平と書かれている。正面には一字一石経王塔とあり、左面には文政三年辰天二月二十五日の文字が刻まれている。

私たちは昼食後、仁田原の正定寺に向かった。

直川地区文化財図

1. 神内釈迦堂石幢
直川赤木字屋形
3. 神内釈迦堂石幢
直川赤木字屋形
4. 栗林正明寺跡層塔
直川字栗林
5. 転輪山浄光寺跡宝塔
転輪山浄光寺宝篋印塔
直川赤木字寺畑
8. 海潮山観音寺跡宝篋印塔二基
直川赤木字中ツル
10. 吹原石幢・五輪塔
直川赤木字ヒグリ
12. 青柳経王塔
直川仁田原字下ツル
19. 正定禅寺
直川仁田原字上ノ地



八、佐伯四国五十六番札所 寶林山正定寺（上ノ地）

この寺は大永三年（一五二三）に赤木村中津留に創建（開基・春山源右衛門ニ赤木殿）された。



寶林山正定寺（禪宗・妙心寺派）

天正十三年（一五八五）の火災により廢寺になったが、貞享四年（一六八七）佐伯藩五代藩主毛利高久公の命により仁田原上ノ地に東西二十五間、南北十四間の土地を賜り元禄四年古屋敷の旧正定寺の古材を利用して再建された。妙心寺派の禪宗寺院である。

この寺の歴史を繙くと、文化九年（一八一二）一月十一日因尾村を始め山間部七ヶ村に発生した佐伯藩百姓一揆に関わっている。百姓一揆の際、頭立った者がこの正定寺に集まり「願望状十ヶ条」を書き記したと言われている。この百姓一揆に参加した檀徒の友八、富藏、善吉が罰を受けている。友八は深島に遠島、富藏と善吉はそれぞれ蒲江浦と入津浦に所替えされている。現在もこの蒲江浦、入津浦には正定寺の檀徒が多くいる。明治二十年に再建された本堂には、本尊の釈迦如来が祀られており、古く風格の漂う鐘楼は昭和五十七年（一九八二）佐伯市指定の文化財に指定された。本堂には二基の駕籠（権門駕籠・法仙寺駕籠）が吊されていた。

正定寺には創建五百年を記念して墨絵アーティストの西本祐貴氏が描いた襖絵がある。



九、ぶんご銘醸株式会社

この正定寺の視察の後、「ぶんご銘醸株式会社」を訪問した。工場では「瓶詰めラベル張りをしている社員」の様子や「瓶詰め工場の流れ」「蒸留装置」を見学した。仕込みの様子や瓶詰め作業の様子は休日のため稼働していなかった。言葉による説明だけであったが酒、甘酒、焼酎の精製の苦勞が良くわかり大変有意義であった。二十九年度の日帰り研修は日田市と本匠地区を訪問する予定である。



法仙寺駕籠と権門駕籠（下）